

プノンペン訪問記

写真・文 土佐 美菜実
Minami Tosa



トンレサップ川沿いにある通り。左側の建物はかつて外国人記者クラブ（FCC）として使われていたもので、現在はレストランになっている。道路脇には客待ちのトゥクトゥクがたくさん並ぶ

二〇一五年一月に資料購入のためカンボジアの首都プノンペンを訪れた。東南アジアの他の地域を何度か訪れたことはあるものの、プノンペンは初めての滞在であった。以下では、資料収集活動の一部について触れると共に、滞在を通じて印象に残った出来事をいくつか紹介したい。

プノンペンの中心地を走るモニボン通りではたくさんのバイク、乗用車、過積載のトラック、そして三輪自動車トゥクトゥクでごった返していた。加えて容赦なく照り続ける強い日差しと排ガスのにおい、さらには方々に複雑な形で配線されている電線が東南アジアの他の都市でも感じるようなごちゃごちゃり感を醸し出している。ただ、道端でオレンジ色の布をまとった僧の姿を見るたびにカンボジア初心者の方は「やっぱり仏教国だなあ」と感じるのであった。一方、中心部から東に少し外れたトンレサップ川方面には観光客向けと思われるレストランやカフェなどが立ち並んでおり、オフィスビルやホテルが次々と建設されているモニボン通りとはまた違ったプノンペンの風景を作り出している。

資料購入のため、洋書専門店モニュメント・ブックスを訪れた。店の前まで到着した時、ちょうどこの店に卸すための本がトゥクトゥクで運ばれてきたところで、思わぬところでローカルな風景を見ることができた。さて、店内に入ってみると想像していた以上に綺麗で内装や色使いもとても洗練されているように感じた。二階にはアイスクリーム屋が入っており、最近日本でもよく見かけるくるくるる本屋さんを連想させる雰囲気となっている。店内を見渡してみ



FCCのレストランからトンレサップ川を眺望する。
この日は天気も良く、風が気持ちよかった



国際書局の入口



カンボジア国家統計局にある出版物販売場の扉



モニュメント・ブックス店内の様子。入り口の一番近いところには神様が祀られており、お供え物もあった

次に、カンボジアの統計書を入手するためカンボジア国家統計局を訪問した。統計局の建物内に併設されている出版物販売の部屋に入ると、右側には販売窓口が、そして左側にはこれまで実施されてきたセンサス関連の品々が展示されている。センサスを宣伝するポスターや報告書そして調査員が実際に使用したIDカード、帽子、Tシャツまで、関連するありとあらゆるものが展示されていた。これらの展示品には日本のJICAをはじめ海外の支援機関の名前や口

と、小説や自己啓発本、雑誌、子ども向け絵本などを置いている一方で、カンボジアを中心とした東南アジア近隣諸国に関する社会科学関連の本も豊富に取り揃えていた。洋書専門店なので、当然これらの本の多くは英語で書かれており、私のような海外の研究所図書館から来た者にとってモニュメント・ブックスは非常に有力な資料収集先といえる。

この他、プノンペンの街を歩いてみると、国際書局 (International Book Center) という名前の書店をたびたび目にした。入ってみると文房具や玩具、小型家電なども販売しつつ、ビジネス書、子ども向け教材、語学書、そして宗教本などの比較的一般向けの本を中心に置いていた。また、国際書局にある本のほとんどはクメール語で書かれており、老若男女問わず現地の人びとが日常的に足を運ぶ街の本屋さんという印象を受けた。このようにプノンペンで訪れた二つの書店はそれぞれに異なる性格を持ち、プノンペンに暮らす人びとのニーズを満たしているようである。

と、小説や自己啓発本、雑誌、子ども向け絵本などを置いている一方で、カンボジアを中心とした東南アジア近隣諸国に関する社会科学関連の本も豊富に取り揃えていた。洋書専門店なので、当然これらの本の多くは英語で書かれており、私のような海外の研究所図書館から来た者にとってモニュメント・ブックスは非常に有力な資料収集先といえる。



プノンペンにオープンしたイオンモール内の様子。正面に見えるのがモニュメント・ブックス



中に入ると右側には出版物が販売されている



調査員のユニフォーム、IDカードなども展示されている。下には日本の国勢調査のポスターが



モール内モニュメント・ブックスの様子。工夫を凝らした絵本など子ども向けのものが多かった



センサスの実施の様子などが写真付で説明されている

モールから出て再び借り上げの車に乗り込みホテルへ戻ろうとしたところ、駐車場から出てまもなくして我々の車が警察に停車を求められた。何事かと不安になったが、警察との交渉は運転手の役割ということで、ひとり助手席に留まっていた。戻ってきた運転手のおじさんから事情を聞いてみると、どうやらモールがオープ

した。モール内にあるモニュメント・ブックスは最初に訪れたところと同じ内装なのだが、その雰囲気があるこのモールのなかに全く違和感なくおさまっていた。資料購入を済ませた後、モール内の飲食店で昼食をとることにしたが、メニューや価格についても、プノンペンの空気によく慣れ始めてきた私を不思議な感覚に陥らせた。

別の日、プノンペンにイオンモールがオープンしたという情報を聞き、モール内にもモニュメント・ブックスがあることを理由に早速行ってみることにした。道中、借り上げた車の中からぼんやりプノンペンの住宅街を眺めているといきなり巨大なショッピングモールが現れた。プノンペンの景色から突如、日本で見慣れた大型ショッピングモールの建物が目に飛び込んできたため、大きな衝撃を受けた。さらに衝撃は続く。外観のみならず、店内もお馴染みの様子で、案内表示版や店舗の看板の文字がクメール語や英語で書かれてはいるものの、「まるで日本にいるみたい!」と思うことばかりだった。モール内にあるモニュメント・ブックスは最初に訪れたところと同じ内装なのだが、その雰囲気があるこのモールのなかに全く違和感なくおさまっていた。資料購入を済ませた後、モール内の飲食店で昼食をとることにしたが、メニューや価格についても、プノンペンの空気によく慣れ始めてきた私を不思議な感覚に陥らせた。

ゴがいたるところに入っており、カンボジアのセンサス活動が多くの海外支援で成り立っている現状が展示からも窺えた。



二台目の車の前方には
故人の遺影



バイクで追従する参列者たち。
みんな白いシャツを着用



葬列の先頭を行く車。立派な作りが周囲の目を引く

とさ みなみ

アジア経済研究所図書館ライブラリアン
東南アジア地域を担当。

ンしてからこの周辺は一方通行に変わったため、
我々はしばらく逆走していたようである。
一方、運転手のおじさんが警察とやりとりを
している間、後方がなにやら騒がしかったので、
車に乗ったまま後ろを振り向いてみると、ちょ
うどお葬式の行列と思われる一団が我々の車の
遥か後方を行進していた。豪華な花輪を積み、
僧を乗せた車と、故人の遺影を前方に掲げ、棺
を乗せた車（霊柩車）がゆっくりと行進してい
た。そしてその後ろには、白いシャツを着た参
列者の何十台ものバイクが追走している。私は
二台の車の荘厳さと、それに追従するバイクの
大群に圧倒されてしまった。初めてカンボジア
の葬列に遭遇して、ここはやはり日本ではなく
カンボジアなのだ、改めて実感した。